



# 同時期に語られた2つの言葉「横（横軸）の発達」と「重症児の生産性」

垂髪, あかり

---

**(Citation)**

日本教育学会第80回大会・ラウンドテーブル：糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話：領域横断による読み解き

**(Issue Date)**

2021-08-25

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Accepted Manuscript

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008544>



同時期に語られた2つの言葉

「横（横軸）の発達」と「重症児の生産性」

神戸松蔭女子学院大学教育学部教育学科

垂髪（うない）あかり

糸賀思想における2つのキーワード

「横（横軸）の発達」

「重症児の生産性」

# 「横（横軸）の発達」

横の広がりとは何かといえは、**かけがえのないその人の個性**です。他の何物ももって代えることのできない個性が、あらゆる発達段階の中味をなしているということです。この中味が個性的にぐんぐんと形成されていく、**もうA子ちゃんはA子ちゃんなんだという個性が、一歳なら一歳のなかに、豊かに豊かになっていく**わけなのです。この豊かさを形成していくのが教育であり、療育ということなのです。

# 「横（横軸）の発達」の創出過程

- ①近江学園「さくら組」（1952年～）、「杉の子」組（1953年～）  
重症児の「感ずる世界」「意欲する世界」への気づき
- ②あざみ寮 知的障害女子の人格形成を目指した実践（1959年～）  
「発達的認識」「発達的に共感」する視点
- ③びわこ学園 重症心身障害児への実践（1963年～）「発達的共感」「横」  
という視点

知的障害女子／懸命に生きる重症児たちと  
それに共感する職員との「発達的共感」関係

無限に、豊かに、「自己実現」していく姿

1965年 「横へのふくらみ」

1966年 「横（横軸）の発達」

# 「横（横軸）の発達」糸賀の語り

「そういういろいろとちがった発達の段階のどれを見ても、その発達段階なりの生活がある。その生活が、ただ寝ているだけであっても、はうだけであっても、またやっと立っているだけであっても、豊かな内容のあるものに育てられるかが問題なのである。縦軸の発達ではほとんど絶望であっても、横軸の発達は無限といってもよい」

糸賀一雄（1968）「特殊教育の思想的背景—人間の価値観について」  
『特殊教育事典』（初出），糸賀一雄著作集刊行会編（1983）所収，p.402

# 「横（横軸）の発達」糸賀の語り

「人間の価値はこの縦軸の比較の世界で相対的に評価されるばかりでなく、

横軸への無限の挑戦の中に見られる絶対的な価値の基準をもっている」

糸賀一雄（1968）「特殊教育の思想的背景—人間の価値観について」  
『特殊教育事典』（初出），糸賀一雄著作集刊行会編（1983）所収，p.402

# 「横（横軸）の発達」糸賀の語り

「三歳の精神発達でとまっているように見えるひとも、その三歳という発達段階の中身が無限に豊かに充実していく生きかたがあるのです。生涯かかってもそれを充実させていく値打ちが充分にあるのです。そういうことが可能になるような制度や体制や技術をととのえなければならぬ。」



# 「重症児の生産性」

この子らはどんなに重い障害をもっているとしても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも、立派な生産者であることを認めあえる社会をつくろうということである。

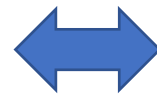
糸賀一雄（1968）『福祉の思想』 p.177.

# 「重症児の生産性」概念の形成まで

蜂谷俊隆（2015）『糸賀一雄の研究 人と思想をめぐって』第10章をもとに

①重症心身障害児施設の創設とその処遇内容をめぐって（1961年～）

島田療育園：「病院形式」  
「社会的重症」



びわこ学園：「教育を中心とした施設」  
「発達保障」

②国立コロニー建設への関与（1963年頃～）

政府：コロニーは「終生の生活の場」  
その集合体として「障害者の村」



糸賀：収容施設の位置付けや性格等  
を指摘



**「保護」という名の「飼い殺し」に対する警鐘**  
**「社会変革」の主体としての重症心身障害児**



1966年

**「重症児の生産性」**

# 「重症児の生産性」 糸賀の語り

「生命はすべて表現的生命、自分自身を表現していくところの命なのです。いいかえますと自己実現が可能な命の姿をすべてが持っているわけで、これは重症であっても重症でなくてもみんな一緒なのです。自己を実現するとか、自己を表現するとかいう表現的生命は、すなわち自分の外にあるものを自分の内なる者の表現の材料にするということでもあります。」

糸賀一雄（1966）「この子らを世の光に」『両親の集い』第127号、128号（初出），  
糸賀一雄著作集刊行会編（1983）『糸賀一雄著作集Ⅲ』所収，pp.379-380.

## 「重症児の生産性」 糸賀の語り

「重症の心身障害児たちは、実は生産社会に生産人として復帰することはできないでしょうが、人間と生まれて人間となるという自己実現をするということは、内と外との関係においてその人間の生産性を認めることに他ならないということです。芸術品につきましても、その作品はみることににおいて生産されているのであります。この重症な子どもたちを認める人びとが親であり、先生であり、社会であるときに、この子どもたちは外からの環境から眺める姿の中に自己を表現していきます。自己実現を試みているこの生産性を私たちは否定することはできません。」

# 「横（横軸）の発達」と「重症児の生産性」

## ●共通点●

1. 語り始めは1966年
2. 重症児に対する価値の転換をくぐる
3. 「自己実現」が2つを結ぶ

# 1. 語り始めは1966年

## 1966年という「時代」

- 能力主義 「他人と社会の厄介になるのではなく、自分のことは自分で始末し、**社会的に自立ができる**」ことを目指した「**精薄教育**」（林部1966）
- 発達のみかた 「**発達は上へ伸びること**というのは、わたしたちの発達理解の仕方が発達障害を起こしていたことに他なりません。**今の教育競争**は、わたしたちの発達の理解の仕方をそのようなものにつくりあげてしまっているのです」（田中1966）
- 終生保護を 重症心身障害児は「**終身にわたり保護**する施設及び居宅保護に際し必要な終身年金あるいはこれを扶養する家族に対して特別手当を支給するような方途等について検討する必要」

（厚生省児童局編（1963）「児童の健全育成と能力開発によってその資質の向上をはかる積極的対策に関する意見書」『児童福祉白書』、田中昌人（1974）より）

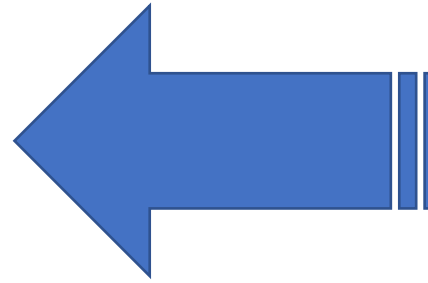
# 1. 語り始めは1966年

## 1966年という「時代」

●能力主義

●「上へ伸びる」  
発達観

●終生保護を



「横（横軸）の発達」

「重症児の生産性」

## 2. 重症児に対する価値の転換をくぐる

### 「横（横軸）の発達」 ・ ・ 糸賀の「発達」観の変化

「満二十歳になっても知能的には五歳か、たかだか六歳程度で**発達がとまってしまう**これらの『**永遠の幼児**』達に対しては、児童福祉の立場からも、将来の**社会的な無能力性**から考えても、当然その**生涯の保護**を保障する一貫した独立の施設がなければならない」（糸賀1950）



「**精神薄弱な子どもたちが、どのように発達する**ものか、単に現象的に人格発達の一部を外面的にとらえるのではなく、その**発達の過程のメカニズム**を総合的に、縦断的に、個体の**内面的な必然性**において把握することの**必要性**」を認める（糸賀1961）



## 2. 重症児に対する価値の転換をくぐる

### 「重症児の生産性」 ・ ・ 糸賀の「重症児」観の変化

「殊に、社会的にはなんの能力もないように見える重度の痴愚や白痴の子どもたちのことは、いたずらに日を重ねていったさきは、一体どうなるのだろう。（中略）**重度痴愚や白痴のためのコロニーは、そこにおいて決して生産的なものを期待できないとしても、その生涯が保障されるべきであろう**」  
（糸賀（年代不詳）「椎木会の独立と落穂寮」『著作集Ⅰ』p.99）



「落穂寮という名前を付けたときの私自身の気持の中には、今から二十年近く前のことですが、やはりこの子どもたちは拾い上げてやらなきゃいけないんだという気持、そういうものを自分の心の中にいま見つめるのでございます。落穂寮という名前はもう変えることはできませんが、**その意味を私たちは本当に新しく開拓して行って、私たちと違った人間がそこにおいて、私たちはそこに恵みを与えろとか、恩情をかけてやるのだ**というような考え方から脱却していきたい」

（糸賀（1968）「目覚めたるものの責任」『著作集Ⅱ』p.295）

# 【再】「横（横軸）の発達」の創出過程

①近江学園「さくら組」（1952年～）、「杉の子」組（1953年～）  
重症児の「感ずる世界」「意欲する世界」への気づき

②あざみ寮 知的障害女子の人格形成を目指した実践（1959年～）  
「発達的認識」「発達的に共感」する視点

③びわこ学園 重症心身障害児への実践  
「発達的共感」「横」という視点

精神薄弱女子／懸命に生きる重症児たちと  
それに共感する職員との「発達的共感」関係

無限に、豊かに、「自己実現」していく姿

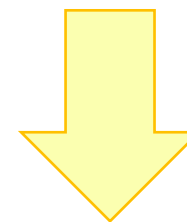
1965年 「横へのふくらみ」



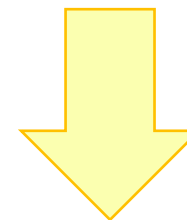
1966年

「横（横軸）の発達」

子どもたちの人格の変容  
と成長の事実をくぐって



その中で「自己との対決」  
を果たし「事上磨練」し



# 【再】 「重症児の生産性」 概念の形成まで

蜂谷俊隆（2015）『糸賀一雄の研究 人と思想をめぐって』第10章をもとに

①重症心身障害児施設の創設とその処遇内容をめぐって（1961年～）

島田療育園：「病院形式」  
「社会的重症」

↔

びわこ学園：「教育を中心とした施設」  
「発達保障」

**びわこ学園の実践**

②国立コロニー建設への関与（1963年頃～）

政府：コロニーは「終生の生活の場」  
その集合体として「障害者の村」

←

糸賀：収容施設の  
位置付けや性格等を  
指摘

**子どもたちの人格の変容  
と成長の事実をくぐって**

**「保護」という名の「飼い殺し」に対する警鐘  
「社会変革」の主体としての重症心身障害児**

**その中で「自己との対決」  
を果たし「事上磨練」し**

1966年

**「重症児の生産性」**

### 3. 「自己実現」が2つを結ぶ

「自己実現」・・糸賀の語り 1967年頃から好んで使用するようになり（高谷2005）

「この子たちは、生ける屍と呼ばれていた。なされるがままになっているものと思われていた。しかし、そうではなかったのである。立派な意思があり、意欲があり、自己主張があった（中略）外界を媒介として自己を実現しようと、たゆみなくはたらいっているのである。」（糸賀1968b）

「どんな障害者をも含めて、万人がめいめい、この社会に生きて、そのなかで自己を実現していくのである。その自己実現を尊重し、必要であれば援護していくという社会の態勢を確立しなければならない」（糸賀1968b）

「このひとたちが、じつは私たちと少しも変わらない存在であって、その生命の尊厳と自由な自己実現を願っており、生まれてきた生き甲斐を求めていることを友愛的に共感して、それが本当に社会の常識となることへの道行きが「福祉」の内容となる」（糸賀 年代不詳）

### 3. 「自己実現」が2つを結ぶ

#### 「自己実現」・・糸賀の語り

「この子らはどんなに重い障害をもっているとしても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも、立派な生産者であることを認めあえる社会をつくらうということである。」（糸賀, 1968a）

### 3. 「自己実現」が2つを結ぶ

**「自己実現」**

障害の重い者が  
「その人なりの  
人間となっていく」

共同  
共感

共に在る他者の  
内面的な変化をもたらす

「かけがえのないその人の個性」  
糸賀（1966）

糸賀、個々の実践者らが  
自らと「対決」し、価値の  
転換を果たすプロセス

**「横（横軸）の発達」**

### 3. 「自己実現」が2つを結ぶ

**「自己実現」**

障害の重い者が  
「その人なりの  
人間となっていく」

「自己実現という生産活動」  
糸賀 (1968a)

共同  
共感

共に在る他者の  
内面的な変化をもたらす

「社会が開眼され、思想の変革  
までもが生産され」る糸賀 (1968a)

**「重症児の生産性」**

# 引用・参考文献

- 糸賀一雄（1950）「問題児の対策」『社会福祉研究』第2号（初出），糸賀一雄著作集刊行会編（1982）『糸賀一雄著作集Ⅰ』所収，p.328.
- 糸賀一雄（1961）「近江学園をめぐる三年間」『近江学園年報』第9号，近江学園，p.15.
- 糸賀一雄（1966）「この子らを世の光に（二）—重症心身障害児の生産性について」『両親の集い』，第128号，p.19.
- 糸賀一雄（1968a）『福祉の思想』NHKブックス.
- 糸賀一雄（1968b）『糸賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会，p.72-77.
- 高谷清（2005）『異質の光』大月書店.
- 田中昌人（1966）『すべての子どもの発達の権利をかちとるために』，大阪京都滋賀発達保障研究会，大泉溥編（2011）『日本の子ども研究—明治・大正・昭和—第13巻，田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』クレス出版.
- 田中昌人（1974）『講座 発達保障への道 夜明け前の子どもたちとともに』全国障害者問題研究会出版部.
- 蜂谷俊隆（2015）『糸賀一雄の研究 人と思想をめぐる』関西学院大学出版会
- 林部一二（1966）「特殊学級における職業教育」『学校運営研究』3月号.